

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580095

研究課題名(和文)日本語語彙知識における漢字読み能力の重要性の研究 オンラインテスト応用を目指して

研究課題名(英文)The study of the importance for kanji reading proficiency in the Japanese lexical knowledge -Toward an application to the online test-

研究代表者

斉藤 信浩(Saito, Nobuhiro)

九州大学・学内共同利用施設等・准教授

研究者番号：20600125

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文):日本語能力試験(漢字級)に準拠した漢字の筆記テスト(90問)と四肢選択式の問題紙で、1)四種と二種の選択問題、2)穴埋め問題、3)用法問題(正誤判断)を作成し、81名の日本語学習者(漢字圏、非漢字圏)を対象に、読み能力が筆記能力を予測するか調査を行った。その結果、漢字圏と非漢字圏の間で、テスト形式による差はなかったが、レベル別には差が見られ、レベルの弁別は可能であることが観察された。漢字圏は下位群では、非漢字圏よりも高い得点を示していたが、中位群以上ではその差はなくなった。語彙力の多さは漢字の筆記力には関係しておらず、漢字の読み能力のみが有意な因果関係を示していた。

研究成果の概要(英文):This study explored how writing proficiencies were related to reading proficiencies among Kanji learners. 4 types of tests were conducted among 81 Japanese language learners: (1) Kanji writing test (90 items); (2) multiple-choice Kanji reading test (60 items); (3) the gap-filling test (30 items); and (4) a true-false test (40 items). The results of ANOVA showed that the Kanji reading score was influenced by the level of grammatical proficiency in both Kanji background learners and non-Kanji background learners. Although Kanji background learners showed high score in the low level group, non-Kanji background learners reached the Kanji background learner's score in the middle and high level groups. To have much vocabularies is not necessarily related to the Kanji writing ability. On the other hand, Kanji reading ability is related to Kanji writing ability.

研究分野：第二言語習得、日本語教育、韓国語習得、日本語習得

キーワード：語彙能力 漢字能力 問題項目 筆記力

1. 研究開始当初の背景

多くの日本語教育機関では、学習者のレベル分けのためのプレースメントテストが実施されている。大規模な日本語教育機関ではこれらのテストを紙ベースで運用するのが困難であり、オンライン化して効率化を図っているところもある。このようなオンラインプレースメントテスト (OPT) では、主に文法力を中心に、読解力や聴解力の測定などが行われ、漢字力の測定が OPT で行われることは珍しい。その理由の1つとして、漢字力を測るためには、筆記能力が要求されるため、紙ベースのテストでなければ測定できないという前提がある。九州大学留学生センターでは、2010年に紙ベースのプレースメントテストを OPT 化し、文法・読解・聴解・漢字の4セクションを設けたが、漢字だけは OPT の得点と実際の受験者の能力が一致せず、漢字のセクションを廃止した経験を持っている (斉藤 2011)。プレースメントテストでの語彙力の測定は漢字圏と非漢字圏の間で設問の方法に工夫が必要である。大規模なテストやオンライン化されたテストでは、四肢選択式の運用力が高い。テスト問題の作成においては、質的な内容に対する考慮のみではなく、現実的な運用を考慮した実施の簡便性も求められる。語彙能力や文法能力の測定のためには、四肢選択式の問題形式が簡便で運用性が高いが、漢字能力を測定するためには、紙形式のテストによって筆記能力を測定する必要が生じてくる。昨今の i-pad のような電子機器の発達により、漢字を手入力できる場合もあるが、実際の運用上ではまだまだ技術的なハードルが高く、当面は不可能であろう。大規模なプレースメントテストが要される機関や、遠隔地に向けてテストを実施しなければならない場合、OPT などによる多肢選択の問題形式によるテストの運用が求められる。そのためには、多肢選択問題形式のあり方について、より深い情報が求められる。

2. 研究の目的

本研究は、漢字の読み能力に着目し、読み能力が筆記能力をどのように予測するのかを検証するのが目的である。オンラインでの運用が可能な四択式の読み問題の得点によって、この程度の漢字読み能力があれば、この程度の漢字筆記能力が予測できるという因果関係がわかれば、漢字テストを OPT で実施することが可能になってくる。そのために、本研究では、漢字の読み能力を、1) 問題形式、2) 語彙能力、3) 正誤判断、の観点から得点分析を行い、加えて筆記テストの得点を分析することによって、読み能力と筆記能力の関係を解明していく。漢字能力は漢字圏出身者と非漢字圏出身者で差が生じることが予測されるため、この語圏別の分析も行う。果たして、OPT を語圏別に行うべきなのか、あるいは、語圏に関係のない、共通の

問題項目の作成を目指すべきなのかも考察した。

3. 研究の方法

3.1. 調査概要

被験者は九州の国立大学に所属する多国籍からなる日本語学習者 80 名 (男=28、女=40、記載なし=9) を対象に、2015年6月から2016年1月にかけて断続的に行われた。平均年齢は 23.62 歳 (SD=3.80) であった。調査は、筆記による形式の漢字筆記テスト 69 問、上級漢字筆記テスト 21 問の計 90 問と、四肢選択式の、漢字読み 45 問、穴埋め 54 問、用法選択 36 問、共起 32 問の計 167 問からなる大規模なペーパーテストを実施した。所要時間は 120 分であり、解答するためにほとんどの学生は 100 分以上の時間を要した。

3.2. 被験者のレベル分け

漢字圏の被験者と非漢字圏の被験者を文法能力で同じレベルに統制するために、1 問 1 点の配点で、日本語能力試験 (JLPT) (2007) に準拠した文法テスト (60 点満点) を与え、得点区分が 25 点以上 44 点以下の者を下位群 (n=17)、45 点以上 52 点以下の者を中位群 (n=22)、それ以上のものを上位群 (n=22) に分類した。得点の区切りは恣意的なものであるが、得点が 40% 以下になる被験者は本調査に対応する能力範囲ではないとみなし、24 点以下の範囲は除外し、得点区分 25 点~60 点の範囲でレベル分けを設定した。文法テストは四肢選択の穴埋め式で、「せんしゅう、テレビをぜんぜん ()。a みませんでした、b みました、c みます、d みません」のようなものである。

母語間に差がないこと、レベル間に差があることを確認するために、2(母語;漢字圏・非漢字圏)×3(レベル;下位群・中位群・上位群)の分散分析を行って検討した結果、レベルの主効果は有意であり ($F(2,55)=94.52, p<.001$)、シェフェの多重比較の結果、下位群、中位群、上位群のそれぞれの間、0.1%水準での有意差がみられた。一方、母語の主効果は有意ではなく ($F(1,55)=.29, p=.590, ns$)、漢字圏と非漢字圏の間には有意差がみられなかった。この結果から、レベルは3群間で差があり、母語間には差がなく、文法テストによって、下位群、中位群、上位群のレベルが統制されていることが確認された。

3.3. 問題概要

3.3.1. 漢字筆記テスト

JLPT の漢字級及び、『Basic Kanji Book vol.1, vol.2』を基盤にして、初級レベルから中上級レベルまでの漢字 69 問 (例: 犬、新聞、発音、離婚、残念、無効 etc.) と上級レベルの漢字 21 問 (例: 振興、削減、著しい、鈍る、街頭 etc.) の 90 問を筆記問題として用意した。1 級語彙 9 語、2 級語彙 18 語、3 級語彙 18 語、4 級語彙 24 語、級外 1 語で

ある。出題形式は、「いぬ dog 犬」のように、日本語のひらがなが提示され、英訳を併記して下線部に該当する漢字を書く。

3.3.2. 多肢項目形式の検証問題

四肢選択式の漢字読みのテスト問題を作成する際、選択肢が四種類に分散している設問と二種類に分散している設問では、どちらがより難易度が高いのであろうか。選択肢が四種類に分散している設問とは、「あたま：a 筆頭、b 頭痛、c 頭金、d 音頭」の中から正答を選択する場合、「頭」という漢字に対して「ひとつ」「ずつ」「あたまきん」「おんど」のように「とう」「ず」「あたま」「ど」の四種類の読みが要求されるものである。一方、選択肢が二種類に分散している設問は、「あい：a 合同、b 合格、c 合計、d 合図」の中から正答を選択する形式で、この場合、「合」という漢字に対して「ごうどう」「ごうかく」「ごうけい」「あいず」のように「ごう」「あい」の二種類の読みが要求される。問題形式は、左端にひらがなで提示された読み方に該当するものを四択の中から選び出す形式で出題されている。四種問題の出題例は「生 なま a 生卵、b 生糸、c 生涯、d 生活」のようである。「生」の正答の読み方は「なま」であり、錯乱肢1から3は「き」「しょう」「せい」というそれぞれ異なった読み方のものである。漢字級自体は2級から4級の範囲内であるが、語彙自体の難易度はJLPT 語彙級の1級から4級と、級外のものも含まれている。例えば、上記の「生糸」「本日」などは級外の語彙である。二種選択の場合、「目」の正答の読み方の「め」以外は、錯乱肢1から3は、同じ「もく」という読み方であり、「め」と「もく」の二種類の読み方から構成された問題群である。出題例は「目め a 目印、b 目的、c 目標、d 目次」のようである。四種選択が25問、二種選択が20問で、計45問をランダムにシャッフルして提示した。

3.3.3. 穴埋め問題

穴埋め54問は、語彙能力を測定するために行ったセクションである。JLPTの語彙級を参考にしながら、1級から3級の範囲内で、名詞18問(和語9問、漢語9問)、形容詞18問(和語9問、漢語9問)、動詞18問(和語9問、漢語9問)の計54問からなる四肢選択式の穴埋め問題である。極力、漢字表記ではなく、ひらがなとカタカナの表記で問題文と刺激語を作成してある。例えば、「ともだちがけっこうするので、()をあげた。a おいしい b おみやげ c おいしい d おみまい」や「たんじょうびは、私にとって()日だ。a てきとうな b とくべつな c かんたんな d ふくざつな」のように、意味的に近い刺激語があり、問題文の意味から、適切な意味の語彙を選択して括弧内に入れる形式であり、語彙能力を測定するのが目的である。

3.3.4. 用法問題

平仮名と片仮名で作成した。レベルはJLPTを参照し1～3級の範囲から抽出した。下位項目に品詞(名詞・動詞・形容詞)と語種(和語・漢語)の別を設けて、級別12語(名詞4語(和語2語、漢語2語)、動詞4語(和語2語、漢語2語)、形容詞4語(和語2語、漢語2語))のような構成で36問を用意した。問題形式は「いなかにくとくうきがきれいでいいですね。」の正答に対して、錯乱肢として「このりょうりはいなかこくてまずいです。(あじ)」、「きのうわたしのいえにいなかが入って来て、おかねをとられてしまいました。(どろぼう)」、「けっこうするときはいなかをプレゼントするのがふつうです。(ゆびわ)」のように作成してある(括弧内は本来の答えで問題紙には記載されていない)。

4. 研究成果

4.1.1. 漢字筆記テスト

得点を2(母語;漢字圏・非漢字圏)×3(レベル;下位群・中位群・上位群)の分散分析を行った結果、母語は主効果が有意であり($F(1,69)=20.95, p<.001, \eta p^2=.250$)、レベルも主効果が有意であった($F(2,69)=26.22, p<.001, \eta p^2=.454$)。母語とレベルの交互作用は有意ではなかった($F(2,69)=2.51, p=.089, ns, \eta p^2=.074$)。レベル別に漢字筆記テストの得点の差を、漢字圏と非漢字圏の間で独立したサンプルのt検定によって検討した結果、下位群では、漢字圏($M=51.70, SD=13.78$)に対して、非漢字圏($M=34.80, SD=14.89$)であり、有意差がみられ($t(18)=-2.63, p<.01$)、中位群も、漢字圏($M=62.06, SD=2.95$)に対して、非漢字圏($M=52.70, SD=10.76$)であり、有意差がみられた($t(25)=-3.42, p<.01$)。上位群も、漢字圏($M=65.25, SD=2.14$)に対して、非漢字圏($M=60.90, SD=5.34$)であり、有意差がみられた($t(20)=-2.58, p<.05$)。

4.2.2. 多肢選択式問題

漢字読みテストの得点を、2(母語;漢字圏・非漢字圏)×3(レベル;下位群・中位群・上位群)で反復のない二元配置の分散分析を行った結果、母語は主効果が有意であり($F(1,69)=17.16, p<.001, \eta p^2=.214$)、レベルも主効果が有意であった($F(2,69)=67.41, p<.001, \eta p^2=.682$)。母語とレベルの交互作用も有意であった($F(2,69)=7.75, p<.01, \eta p^2=.198$)。

レベル別に漢字読みテストの得点の差を、漢字圏と非漢字圏の間で独立したサンプルのt検定によって検討した結果、下位群では、漢字圏($M=24.30, SD=5.96$)に対して、非漢字圏($M=16.70, SD=6.22$)であり、有意差がみられたが($t(18)=-2.79, p<.01$)、中位群は、漢字圏($M=34.76, SD=6.87$)に対して、非漢

字圏 (M=32.30,SD=6.08) であり、有意差がなく ($t(25)=-.94, p=.357, ns$)、上位群も、漢字圏 (M=39.20,SD=5.63) に対して、非漢字圏 (M=43.50,SD=4.10) であり、有意差がみられなかった ($t(20)=-2.07, p=.052, ns$)。文法能力でレベルが同等に統制された、漢字圏と非漢字圏の被験者の間で、漢字読み能力は下位群のみでは漢字圏が高く、中位群と上位群では等しいという結果が観察された。

4.1.3. 穴埋め問題

穴埋めテストの得点を、2(母語;漢字圏・非漢字圏)×3(レベル;下位群・中位群・上位群)で反復のない二元配置の分散分析を行った結果、母語は主効果が有意であり ($F(1,69)=10.77, p<.001, \eta p^2=.146$)、レベルも主効果が有意であった ($F(2,69)=65.23, p<.001, \eta p^2=.674$)。母語とレベルの交互作用は有意ではなかった ($F(2,69)=1.05, p=.356, ns, \eta p^2=.032$)。

レベル別に穴埋めテストの得点の差を、漢字圏と非漢字圏の間で独立したサンプルの t 検定によって検討した結果、下位群では、漢字圏 (M=24.30,SD=5.96) に対して、非漢字圏 (M=16.70,SD=6.22) であり、有意差がみられたが ($t(18)=-2.79, p<.01$)、中位群は、漢字圏 (M=34.76,SD=6.87) に対して、非漢字圏 (M=32.30,SD=6.08) であり、有意差がなく ($t(25)=-.94, p=.357, ns$)、上位群も、漢字圏 (M=39.20,SD=5.63) に対して、非漢字圏 (M=43.50,SD=4.10) であり、有意差がみられなかった ($t(20)=-2.07, p=.052, ns$)。文法能力でレベルが同等に統制された、漢字圏と非漢字圏の被験者の間で、語彙能力では下位群のみでは漢字圏が高く、中位群と上位群では等しいという結果が観察された。

以下の図1は、4.1.1.漢字筆記テスト、4.1.2.穴埋めテスト、4.2.3.漢字読みテストの漢字圏と非漢字圏の間の得点の関係を簡略的に図示したものである。

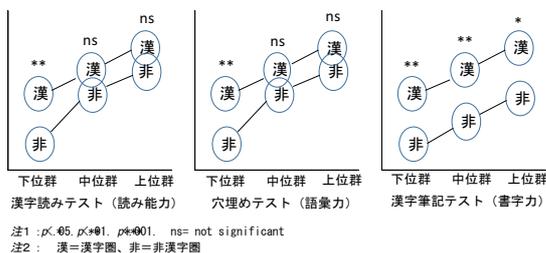


図1 各テストの漢字圏と非漢字圏の比較

文法能力でレベルが同等に統制された漢字圏と非漢字圏の被験者の比較において、やはり漢字の筆記力では漢字圏が非漢字圏よりも一貫して高い得点を得ており、漢字の読みや語彙力でも、下位群で漢字圏は非漢字圏よりも高い得点を得ていた。しかし、漢字の読みや語彙力では中位群で非漢字圏は漢字圏に追いついているのが観察された。

4.2. 問題形式の差による影響

4.2.1. 母語別の結果

選択形式の別が母語に現れるかどうか、 t 検定によって検討した結果、以下、表1のようになった。

表1 語圏別の結果

		四種選択	二種選択	F値
非漢字圏	下位群	M 7.90 SD 3.18	M 7.20 SD 4.08	ns
	中位群	M 16.50 SD 4.14	M 17.20 SD 2.94	ns
	上位群	M 21.40 SD 1.35	M 19.30 SD 1.25	**
	下位群	M 13.90 SD 4.53	M 14.50 SD 4.95	ns
	中位群	M 18.12 SD 2.80	M 18.12 SD 1.73	ns
	上位群	M 21.50 SD 1.51	M 20.17 SD 1.03	**

注: * $p<.05, **p<.01, ***p<.001, ns=not\ significant$

下位群の四種選択では、漢字圏 (M=13.90, SD=4.53) に対して、非漢字圏 (M=7.90, SD=3.18) となり、1%水準で有意差が見られた ($t(18)=-3.427, p<.01$)。二種選択でも、漢字圏 (M=14.50, SD=4.95) に対して、非漢字圏 (M=7.20, SD=4.08) となり、1%水準で有意差が見られ ($t(18)=-3.60, p<.01$)、共に漢字圏のほうが高い得点となっていた。中位群の四種選択では、漢字圏 (M=18.12, SD=2.80) に対して、非漢字圏 (M=16.50, SD=4.14) となり、有意差は見られなかった ($t(25)=-1.12, p=.237, ns$)。二種選択でも、漢字圏 (M=18.12, SD=1.73) に対して、非漢字圏 (M=17.20, SD=2.94) となり、有意な差は見られなかった ($t(25)=-1.03, p=.314, ns$)。上位群の四種選択でも、漢字圏 (M=21.50, SD=1.51) に対して、非漢字圏 (M=21.40, SD=1.35) で差がなく ($t(20)=-.16, p=.873, ns$)、二種選択でも漢字圏 (M=20.17, SD=1.03) に対して、非漢字圏 (M=19.30, SD=1.25) となっており、差は見られなかった ($t(20)=-1.78, p=.090, ns$)。

4.2.2. レベル別の結果

選択形式の別がレベルに現れるかどうか、 t 検定によって得点を比較した。

表2 レベル別の結果

		漢字圏	非漢字圏	t値
下位群	四種選択	M 13.90 SD 4.53	M 7.90 SD 3.18	**
	二種選択	M 14.50 SD 4.95	M 7.20 SD 4.08	**
	四種選択	M 18.12 SD 2.80	M 16.50 SD 4.14	ns
	二種選択	M 18.12 SD 1.73	M 17.20 SD 2.94	ns
中位群	四種選択	M 21.50 SD 1.51	M 21.40 SD 1.35	ns
	二種選択	M 20.17 SD 1.03	M 19.30 SD 1.25	ns

注: * $p<.05, **p<.01, ***p<.001, ns=not\ significant$

非漢字圏では、下位群で四種選択 (M=7.90, SD=3.18) に対して、二種選択 (M=7.20, SD=4.08) となり、有意差がみられず

($F(1,9)=1.16, p=.310, ns$)、中位群でも四種選択 ($M=16.50, SD=4.14$) に対して、二種選択 ($M=17.20, SD=2.94$) となり、有意差がみられなかったが ($F(1,9)=1.29, p=.285, ns$)、上位群では四種選択 ($M=21.40, SD=1.35$) に対して、二種選択 ($M=19.30, SD=1.25$) で、1%水準で有意差がみられた ($F(1,9)=12.85, p<.01$)。

漢字圏では、下位群で四種選択 ($M=13.90, SD=4.53$) に対して、二種選択 ($M=14.50, SD=4.95$) となり、有意差がみられず ($F(1,9)=.32, p=.588, ns$)、中位群でも四種選択 ($M=18.12, SD=2.80$) に対して、二種選択 ($M=18.12, SD=1.73$) となり、有意差がみられなかったが ($F(1,16)=.00, p=1.00, ns$)、上位群では四種選択 ($M=21.50, SD=1.51$) に対して、二種選択 ($M=20.17, SD=1.03$) で、1%水準で有意差がみられた ($F(1,11)=9.51, p<.01$)。

表1の結果、選択形式による差は語圏別には現れなかった。上位群で四種選択の得点が高く出ているが、漢字圏も非漢字圏も同じ傾向であった。表2の結果、レベルごとに見ると、下位群では四種選択でも二種選択でも、漢字圏の方が高く得点していたが、これは、図1にあるように、そもそも漢字圏は下位群の段階で非漢字圏よりも高い得点を得ているので、当然の結果であり、これは問題形式に起因したものではない。この結果、問題形式の種別は語圏にもレベルにも影響はないことがわかった。

4.3. 用法問題

用法問題の得点は、平均 21.93 点 (標準偏差 7.75) であった。2(母語;漢字圏・非漢字圏)×3(レベル;下位群・中位群・上位群)で反復のない分散分析を行った。その結果、母語の主効果は有意差がなく ($F(1,61)=3.18, p=.080, ns, \eta^2=.048$)、母語とレベルの交互作用も見られなかった ($F(1,61)=.18, p=.833, ns, \eta^2=.006$)。この結果、用法問題は漢字圏と非漢字圏で等しく得点することが観察された。一方、レベルの主効果は有意であったため ($F(2,61)=39.42, p<.001, \eta^2=.556$)、多重比較を行ったところ、下位群<中位群<上位群、の順に 0.01%水準で有意差が見られた。項目の測定度を精査するため、中村 (2002) で開発されたテストデータの分析プログラム (T-DAP ver.2.0) を用いて分析した結果、項目困難度 (DIFF) の平均は 0.609 (最低 0.224, 最高 0.961) で、実質選択肢数 (AENO) の平均は 2.265 (最低 1.165, 最高 3.541) であった。標準適切度 (SATOT) の平均は 1.500 (最低 1.174, 最高 1.893) となり、適切な問題項目群であることが確認された。

4.4. 総合考察

漢字読み能力、語彙能力、漢字筆記能力が相互にどのように関係しているかを明らか

にするために、構造方程式モデリング (SEM) で確認的因子分析を行った。漢字読み能力と語彙能力の2つを潜在変数として、漢字筆記能力を観測変数に設定した。

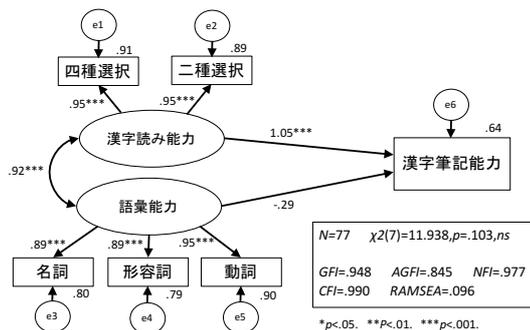


図2 漢字読み能力と語彙能力による漢字筆記能力の確認的因子分析

この図2の結果は、漢字読み能力と語彙能力は相互に関係性があるが、漢字の筆記能力に対しては、語彙能力が高くてもプラスに影響することはなく、漢字の読み能力のみが漢字の筆記能力に関係していることを示している。これは、中上級で多くの語彙を知っている非漢字圏の日本語学習者が、書かしてみると漢字がほとんど書けないという現場の日本語教師の経験とも符合する結果である。また、語彙能力が、名詞、形容詞、動詞などの品詞の別に関係なくその知識が構成されていたという結果も、学習者の語彙力にはあまり品詞別の偏りが無いという現場の教師の直感とも一致する。そして、本稿がターゲットとしていた漢字読み能力に対する、四種選択と二種選択の選択肢の形式の別は、漢字読み能力には関係なく等しく有意な因果関係があり、差がないという結果であった。

4.5. まとめ

漢字の筆記能力を予測するためには、語彙能力ではなく、漢字の読み能力が強く影響していることがわかった。また、問題形式には影響を受けないことがわかった。この結果は、漢字の読み能力を正確に測定できれば、一定レベルの漢字筆記能力が予測できることを示している。即ち、単純に読みだけを要求する四択問題であっても、筆記力を測定することができるのである。本研究は、検証のための実験的な問題項目を多用したため、実用レベルで運用可能な問題項目のセットは提供できないが、3.3.1.の多肢選択問題、3.3.4.の用法問題は一部をそのまま運用することができる。今後の研究課題として、本研究で得られたテスト作成の手法から、新規にオンラインで運用可能な問題項目を作成することが可能である。オンラインで実施運用をし、どのような得点が現れるのか、その分析を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 件)

斉藤信浩、大神智春、大和祐子

「漢字読みテストにおける四種選択と二種選択の影響について」『小出記念日本語教育研究会』vol.25 (審査中)

[学会発表] (計 件)

斉藤信浩、大和祐子、大神智春

「オンライン運用を目的とした語彙力測定のための用法問題の分析」2016年度日本語教育学会秋季大会 (審査中)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

斉藤 信浩 (SAITO,Nobuhiro)

九州大学・留学生センター・准教授

研究者番号：20600125

(2)研究分担者

大神 智春 (OHGA,Chiharu)

九州大学・留学生センター・准教授

研究者番号：50403928

研究分担者

大和 祐子 (YAMATO,Yuko)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・

准教授

研究者番号：80707448